

104. <涙のエコサン>

その昔、江戸では、町から出るし尿は郊外の農家が収集し、肥料として農地に施用するというリサイクルが行われていたことはよく知られている。最近では、ヨーロッパ中心にこのようなリサイクルを推進する動きがあり、エコサニテーション（略してエコサン）と呼ばれている。しかしながら、ほんの数十年前まで我国の地方都市では、エコサンはごく普通に行われていたのである。

私は瀬戸内の小都市で育ったが、中学生の頃、両親が家の近くに畑を借り、トマトやキュウリ、大根等を栽培していた。これは、現在の家庭菜園のように都市生活者が癒しを求めて土に触れることが目的では無く、家計の足しにするためだったのである。

当時、町には下水道は無く、トイレは汲み取り式であった。畑では化学肥料も使うものの、し尿も普通に施用されていた。私の家でも、時々、し尿を畑に施用することがあり、日曜日には作業に駆り出された。父親がブリキ缶で拵えた肥え桶を、天秤棒の前を父親、私が後ろを担ぎ、畑までのゆるやかな斜面をバランスを取りながら運んでゆくのである。いわゆる肥え担ぎである。恐らく、下水道界広しと言えども、肥え担ぎを体験したことのある人はまずいないだろう。これは私の密かな自慢である。

ところで、当時、近所に某社の社宅があり、時々、東京から転勤してくる人がいた。同級生のS子は4月に父親の転勤で東京から転校してきたのであったが、当時の田舎中学生にとっては、東京から来た女の子は、まるで別世界から来たお姫様のような存在で、たちまちのうちに男子生徒の憧れの的になったのは言うまでも無い。

さて、日曜日の有機肥料運搬時の心配事は、もし、この姿をS子に見られたらどうしようということであった。このため、できるだけ早く済ませるようにして、何とかS子との遭遇は避けられていた。しかし、ある日のこと、天秤棒を担いでいる時、視界の端の遠くを何か白いものがよぎった。ハッとして、そちらを向くと白い服のS子と目があった。最悪の事態である。S子は、直ぐに目を逸らしたが、私の心は動揺し、それに伴ってブリキ缶の中身もチャッポーン、ピッチャーンと大きく揺れた。「こら、しっかり担げ！」と父親の怒声が飛び、何とか畑まで運んだが頭の中は真っ白だった。その後、学校でもS子の顔をまともに見ることはできなかった。

今でもエコサンと聞けば、反射的にこの時の光景が目に浮かぶ。しかし考えてみれば、地球に優しくあるためには、汗と涙は欠かせないものなのである。

< 理事 村上孝雄 >

※ J S 技術開発情報メール No. 117 号(2011/9/5)に掲載